

「お母ちゃん、ごめん！」 家族に捨てられた恨みが 感謝に変わるまで

大阪府 林眞澄さん（58歳）



親が我が子を殺したり、子どもが親を殺したりすることが頻繁に起きています。そんな報道を耳にするたびに、「私も一步間違えていたらそうなつていたかも」と思わずにはいられません。

母親を子どもの頃からずっと恨み続けてきた私が、本当の親の思いに気づくことができたのは、この靈友会の教えに巡り合ったからなのです。

小学生のときだった。学校から帰ると家の中はもぬけの殻。家族は幼い林さんを残して、いなくなってしまった。施設から学校に通い、必死に生きようとする林さんの力の源は母を恨むことだった。

「お母ちゃん、ごめん！」

家族に捨てられた恨みが感謝に変わるまで

**どうして家族は
私を置いて
家を出ていったのか？**

小学校の5年生のときでした。両親、兄と姉、みんなで朝ご飯を食べて、私はいつも通り学校に行きました。帰宅をして家の中にいると、家財道具が一切ありません。家族の姿もなく、私は急に引っ越しでもすることになつて、あとで誰かが迎えに来るのかなと待っていました。

ところが、いつまで経つても誰も帰つてくる様子はなく、しだいに辺りが暗くなつてきました。急に不安になつて学校に戻ると、まだ担任の先生がいてくれていて、事の次第を話すと、いろんなところに連絡をとつてくれました。しかし、一向にらちが

明かず、その日は担任の先生の家で泊まることになりました。
次の日も次の日も、家族は帰つてこず、私は自分が置き去りにされたのだと、ようやく理解できました。結局、私は施設から学校に通うことになりました。どうして家族は私を置いて家を出ていったのか。そのことばかりを考え、日々は過ぎていきました。

確か中学3年生のときだつたと思います。私宛に父から手紙が届きました。そこには私のことを心配する父の気持ちが綴られていました。それからも時々手紙は届き、一緒にバナナがひと房送られてきたこともありました。誕生日には千円札が3枚入つていたこともあります。家を出ていった理由などは書かれていませんでしたが、父に

会いたいと心の底から思いました。一方で、一切連絡もしてこない母を恨み、その気持ちは募つていくばかりだったのです。

私が施設を出て、地元の銀行に就職した翌年、父は亡くなりました。父方の祖母が教えてくれたのですが、過労死だったそうです。なぜ父がそんな死に方をしなければならなかつたのか。それを知つたのは靈友会の教えと出合つたあとのことなのです。

恨むことが 私の生きる力に

一切、音信不通だつた母と再会することになつたのは、23歳のときでした。銀行で私を見かけたいどこから話を聞いて、ある日、突然、母が職場を訪ねてきたのです。

「お母ちゃんは今幸せなのよ。あなたも幸

すぐに母だと分かりました。思いもよらぬ再会に最初は言葉が見つかりませんでしたが、私は母を恨んでいた心を隠して、母と言葉を交わしました。

「あっ、お母ちゃん。何？」と素っ気なく。母はそんな意外な態度をとる私に少し驚いた様子でした。私が「一言だけいいよ。私を残していなくなつた理由を教えて」と尋ねると、言いづらそうに話しだしました。父が仕事中に子どもを車ではねて、その償いのために家計が火の車だつたということ。それで遂に、につもさつちもいかなくなり、私を残して家を出ていくしかなかつたこと。そして、そのあと離婚をして、自分は兄と姉を連れて再婚をしたと教えてくれました。

父の仕事中に子どもを車ではねて、その償いのために家計が火の車だつたということ。それで遂に、につもさつちもいかなくなり、私を残して家を出ていくしかなかつたこと。そして、そのあと離婚をして、自分は兄と姉を連れて再婚をしたと教えてくれました。

「お母ちゃん、ごめん！」

家族に捨てられた恨みが感謝に変わるまで



母親の洋子さん(84歳)と

でした。ある日、兄が私を訪ねてきたのです。そして、私にこう言いました。「お前にだけ、こんな不憫な生き方をさせてしまってすまない。自分で幸せになつた、お兄ちゃんを許してくれ」と。そして、「お前のことと一緒にしたいんだ。俺は靈友会に入つて先祖供養の教えをしている。一緒にしよう」と言われ、懐かしい父の顔が思い浮かんできました。

かなにずつと心を閉ざしたまま生きてきた自分でしたが、兄の言葉で何かスッと肩の荷が軽くなつたようでした。「お兄ちゃん」と言つたあとは言葉にならず、心の底から、父の供養がしたいと思いました。

靈友会に入会すると支部長から「靈友会は親孝行の教え。親を思つて百日間の修行

せにね」と言葉をかけられ、はらわたが煮えくり返りました。「自分たちだけが幸せになつて、なんで、そんなことが言えるの。私がこれまでどんな思いで生きてきたか

せにね」と言葉をかけられ、はらわたが煮えくり返りました。「自分たちだけが幸せになつて、なんで、そんなことが言えるの。私がこれまでどんな思いで生きてきたか

知つてゐる。借金を返すために死んだお父ちゃんがかわいそう」私は、いつか母親を殺してやるんだとさえ思いましたが、強がつて、わざと平静さを装い、「あつ、そつ、じやあね」とだけ言つて、母と別れました。

なぜ、幼い私だけを置き去りにしていなくなつたのか。その答えだけが分からぬまま、時間は過ぎていきました。恨むことが私の生きる力となり、その思いは増すばかりでした。

一人では思ひも
しなかつたことを、
相手を通して
感じるよう

そんな私に転機が訪れたのは30歳のとき

をしてみなさい」と言されました。でも、母のことを考へると、とてもそんな気持ちになれません。初めは逆らつてばかりいましたが、「やれば必ず何か気づくことがあるはず」と言われ、半信半疑でお経をあげ始めました。すると、ときどき隣に父がいるような感じがしました。父が私のお経を聞いている気がして、胸が熱くなりました。

百日間の修行では、導きもしました。不思議でしたが、私が声をかけて入会する人は、どこか自分と境遇が似ている人ばかりなのです。ある青年は親との折り合いが悪く、「いつかあいつを殺してやる」と言つていました。

その青年と話していると、自分自身を見ているようで、一人では思ひもしなかつたことを、相手を通して感じるようになります

した。その人にはその人なりの言い分があります。恨む気持ちもわかります。でも、一方的に感情をあらわにする青年の話を聞いていて、相手の気持ちはどうなの。相手にも理由があるので?と思ふようになったのです。

いつしか私は、親と子が引き裂かれる苦しみを背負つてまで、そうしなければならぬたのです。

私は見捨てられた
わけでは
なかつたんだ

なかつた両親の気持ちはどれほどのものだつたんだろうと、考えるようになつていきました。そして、さらに自分なりの修行を続けていく中で、「つらかったのは自分一人だけじゃなかつたのかも知れない」と、ようやく気づいたのです。

した。その人にはその人なりの言い分があります。恨む気持ちもわかります。でも、一方的に感情をあらわにする青年の話を聞いていて、相手の気持ちはどうなの。相手にも理由があるので?と思ふようになったのです。

いつしか私は、親と子が引き裂かれる苦しみを背負つてまで、そうしなければならぬたのです。

私は見捨てられた
わけでは
なかつたんだ

なかつた両親の気持ちはどれほどのものだつたんだろうと、考えるようになつていきました。そして、さらに自分なりの修行を続けていく中で、「つらかったのは自分一人だけじゃなかつたのかも知れない」と、ようやく気づいたのです。



護国神社で会員の青年と



林さんの趣味はヒップホップダンスを踊ること

話してくれました。

その方法が正しかつたかどうかは別にしても、両親は考えに考えて、泣く泣くそうしたんだと分かりました。母は私を見捨てたわけではなかつたことに気づいたんです。

その後、母は靈友会に入会して、私と一緒に父のためにお経をあげてくれています。母を恨むことしかできなかつた私が、こんな時間が過ぎせるようになつて、運命は変えられる。すべて自分次第なのだと、今、しみじみそう感じています。

法華経は親が子を思い、子が親を思う教えと、支部長から教えてもらいました。自分と似た境遇の人たちに、私のこの体験を伝え、多くの人たちに親子の絆を取り戻してもらうことが役目と信じて、これからも一生懸命教えに取り組んでいきます。

『あした21』2020年9月号から

2021.04 発行
靈友会